

# 農村におけるアブラガリの栽培と販売

—島根県松江市島根町を事例に—

中 野 洋 平

(島根大学地域未来戦略センター)

The Production and Transaction of Tung-oil tree in Japanese rural Communities.

- The Case of Shimane Town, Matsue City, Shimane Prefecture

Yohei NAKANO

キーワード：油桐、桐油産業、農家の副業

Keywords : tung oil, tung oil industry, farmer's side job

## 1. はじめに

初夏、島根県北部の島根半島では、白い花をつけ、青々と葉を繁らせたアブラギリ（油桐）の木々をみることができる。トウダイグサ科のアブラギリは秋に無数の丸い実をつけ、人々はその種子から「桐油」を絞り、燈明や油紙製造、インク、木材の塗布剤等として利用してきた。

現在の我が国における桐油産業は中国産の流通によって下火であるが、かつては、規模の差こそあれ各地で生産が行われていた。桐油の製造は、アブラギリを栽培し、実を採集して種子を取り出すところから始まる。ここまでの作業を農家が行い、後は種子を専門業者が買い取って精油していた。現金収入に乏しかったかつての農村において、アブラギリの栽培・販売活動は重要な副業だったのであり、生業の一つとして生活のなかにとけ込んでいた。



写真1：アブラギリの実（上）と種子（下）筆者撮影

桐油産業史に関するまとまった研究はなく、現在確認している限りでは福井県や島根県等の自治体誌で地場産業の一つとして紹介されている程度である。まして、生業論の視座から農村における実態を取り扱った研究は皆無である。そこで筆者は、平成27年度より全国でも桐油産業の盛んだった島根県松江市の農村において、かつて行っていたアブラギリ栽培・販売活動の調査を実施している。対象となる地域は、島根半島日本海側の旧島根町域に含まれる、大芦、加賀、野波の各集落であり、対象となる時期は桐油産業最晩期の昭和20年代である。

この調査は農村、特に島根半島の村々の複合的な生業を知るうえで重要であるとともに、地域の資源を理解しこれを活用しようとする地域づくりに対しても、有益な知見を提供できると考える。

そこで本稿は、農村における生業としてのアブラギリ栽培・販売活動研究へ向け、我が国の桐油産業史を整理し、これまで実施した若干の調査報告を行うこととしたい。

## 2. 桐油産業史概略

まず桐油産業史の全体を大正期を中心に整理し、そのなかでの島根県の位置を確認しておこう。

### 1) 地域別生産額

明治35年(1902)では、全国の生産高が4,616石で、販売額が137,956円であった。そのうち、1位が福井県1,868石/56,279円、2位が島根県1028石/32,026円、3位が千葉県656石/19,264円であり、全体の約6割が福井・島根両県で生産されていたことがわかる<sup>1)</sup>。この状況は昭和8年(1933)でも同様で、全国429,831トン/184,428円のうち、福井県が217,381トン/104,438円、島根県186,781トン/68,594円だった<sup>2)</sup>。

### 2) 呼称

アブラギリの呼称は、地域によって異なっていたらしい。大正元年(1912)の調査をまとめると、次のようになる<sup>3)</sup>。

どくえー千葉県全域

あぶらきー石川、福井、島根、静岡

ころびー福井県若狭地方、島根県出雲地方

やまぎりー石川県加賀地方、島根県出雲地方

ごろたのきー島根県出雲地方

だまのきー三重県伊勢地方

島根県に関してみれば、あぶらき、ころび、やまぎり、ごろたのきと複数の呼称があったことがわかる。種子も同じく、あぶらみ、ころび、ごろたのみ等と呼ばれた。

### 3) 用途の変化

江戸時代において桐油は唐傘、雨合羽、油団の撥水剤としても用いられたが、主には燈明用だった。

一方で、農村では防虫剤として重要な役割を果たした。周知のように「いなご」や「うんか」の大量発生は、しばしば農村に深刻な作物被害をもたらしてきた。人々は「虫送り」に代表されるような呪術的要素を伴う防虫対策を試行錯誤してきた。

19世紀に入ると農業技術を記した「農書」が数多く出版され、全国に普及していく。そのなかの文政9年(1826)に農学者の大蔵永常が記した『除蝗録』は、従来の篝火を用いた虫送りとは異なる害虫駆除方法を記したものである<sup>4)</sup>。すなわち鯨油を水田に張り害虫を落として駆除するという方法であるが、ここで鯨油を用意できない地域では桐油を用いることが提案されている。

明治時代に入り石油が輸入、活用され始めると、桐油は燈明用としての役割を減じることとなる。防虫剤としても、近代農法の普及により同様であった。一方で、近代的工業の発達により、工業用塗料としてペンキ、ニス、印刷用のインク等の需要が生じた。軍需工業への利用も多かったらしく、昭和初期の段階では国内生産だけでは間に合わず、中国から大量に輸入していたことがわかる<sup>5)</sup>。

### 4) 産業の管理と奨励

福井県若狭地方は国内最大の桐油生産地であった。『福井県史』によると、17世紀中頃の承応2年(1652)に若狭地方を領有していた小浜藩の藩主、酒井忠勝が領内に「桐之木」の植付けを命じたという<sup>6)</sup>。我が国の産業としての桐油生産は、徳川政権下における諸藩の殖産政策が端緒だったといえるだろう。小浜藩の桐油産業は18世紀中頃から軌道に乗り、自藩で採れた種子のみならず石見や越前に至る

日本海側各地より種子を集積して搾り、精油して京や大坂へ販売するようになった。

一方、国内生産第2位の島根県出雲地方では、松江藩が木実方を置いて生蠟の原料となる櫨とともにアブラギリの管理を行っていた。桐油生産の端緒は7代藩主松平治郷による藩財政改革の一環であったといわれる。ただ小浜藩と異なるのは、桐油を藩外に流通させなかった点であろう。若狭・越前産の桐油を購入し藩内に備蓄し、藩内で生産される桐油は油座に管轄させ、藩内にのみ流通させていたのだという。

明治以降では、大正元年（1912）に農商務省山林局が桐油産業の振興を狙って『油桐ノ造林法並桐油ノ調査』を刊行していることや、昭和7年には農林省が省令第十五号「漆、油桐及び櫨樹増殖奨励規則」で栽培を奨励していることから、全国的に政府が後押ししていた。太平洋戦争後は、冒頭で述べた通り中国産の桐油が大半となり、国内生産は下火になっていったと考えられる。

### 3. 近世・近代における島根半島での採集活動

次に島根の農村の側からアブラギリの栽培と販売をみていこう。

#### 1) 産地と栽培場所

大正元年の調査によると、島根県内のアブラギリ種子の産地は、宍道湖・中海周辺の八束郡、能義郡、大原郡、飯石郡、簸川郡、石見地域東部の安濃郡、邇摩郡、邑智郡と、県東部に集中していたらしい<sup>7)</sup>。ほぼ松江藩域と重なっており、藩による殖産政策の影響を見て取ることができる。

松江藩時代にアブラギリを植え付けていた場所については、文化13年（1816）に作成された、島根郡上講武村（現、松江市鹿島町上講武）の山絵図が参考になる<sup>8)</sup>。この絵図は自村の腰林（個人所有の山林）を示したものである。上講武村は島根半島の山間に位置し、中央を東西に貫く多久川に沿って田圃が展開して南北を囲む山々の谷筋に人家が散在している。腰林はこの谷筋に沿った山々が該当する。現在でいう里山で、人々はここから日々の燃料や肥料となる下草を得ていた。

さて、この谷筋に展開した腰林と人家・田圃の間に、無数の赤い丸印と三角印が記されている。凡例によると丸印が「油木」、三角印が「櫨木」とある。油木はアブラギリであり、上講武村ではこのような場所に栽培されていたことがわかる。山絵図にはアブラギリと櫨だけが特別に記されており、村にとっても藩にとっても重要な資源であったことがわかるだろう。



図1：上講武村山絵図（一部）

#### 2) 松江藩時代の村とアブラギリ

松江藩時代の村々では、このアブラギリをどのように取り扱っていたのだろうか。『島根町誌』を参照しながら概要をみてみたい<sup>9)</sup>。まず、村々においてアブラギリの数量は細かく把握されていた。島根郡大芦浦（現、松江市島根町大芦）では、「油木改帳」

を作成して、村中の誰が、何本のアブラギリを所有しているか管理している。文化6年(1809)の帳簿をみると、大芦全体では7,684本が栽培されていた。天保7年(1836)の記録ではここから66石8斗3升9合(約120俵 $\approx$ 7.2トン)の種子が採れている。アブラギリを栽培している山地を、油木畑と呼んだ。

種子には生産高に応じて税である運上が掛けられ、その割合は不明であるが、相応分が松江藩に上納された。島根町加賀には、上納する種子を保管する「木の実蔵」があり、加賀港より船にて城下へ運搬されたという。

手元に残った種子は農家の取り分で、問屋や油屋を介して販売された。販売価格は年によって異なるが、明治5年(1872)に加賀別所(現、松江市島根町加賀別所)の種子は、1俵約46.2貫文で取引されており、当時の米1俵は約44貫文であるから、米価を上回っていた。このため、当時の油木畑は質草としても扱われている。

種子は村方や城下の油屋で製油され、桐油として販売された。村方の油屋としては、例えば島根町大芦には「油屋喜助」がいた。城下には複数の油屋があり、これが先述した油座を形成していたと考えられる。

### 3) 共同事業

さらに具体的な採集と販売の方法をみていこう。昭和11年(1936)の『中外商業新報』に、八束郡野波村(現、松江市島根町野波)での実態が記されており、当時を知る貴重な資料であるので該当箇所を以下に引用する<sup>10)</sup>。

#### 七、島根県の栽培販売事例

島根県八束郡野波村では桐実の共同造林並に販売統制に就いて藩政時代から今日に至るも何等変る所なく継承されている。産業組合制度がない時代に既に統制ある販売法及び共同事業が行われると共にその生産を奨励し更に年末一斉に代金を配分し取引を円滑にしているという事例は、わが農政史上並に経済上からみるも特記すべき事項と思われるから左にその大要を紹介しよう。

#### (イ) 共同造林

野波村に於ける桐樹林は始め共同で開墾造林したものである、大体二十五戸を標準に一組とし一定の地区を分割し、年々造林して来た。組合全体の共同作業をして造林されたものを大仲間といい、造林面積が最も多い。又組合内の一部三戸又は四戸共同して造林したものを小仲間と称している。しかし後になり個人でも開墾が行われ、時によっては造林地の売買も行われたので、個人有(全面積の約四割)に帰したものもあるが、現在大仲間七組、地区七箇所、小仲間地区十五ヶ所が残っている。前記桐実林は各組長において管理し、造林、手入、植栽、下刈、収穫(当日収穫したものは男女同様に取扱い秤量し平等に分配する)等は区長が命令し、各組長の指揮によって日を定め同時に共同作業によってこれを行い、収穫したものは各自宅に持ち帰って臼で搗いて殻と実とに分けることは藩政時代から今日迄変ることなく続けられている。

#### (ロ) 販売統制

- (1) 桐実の販売に就いては村問屋之を取扱い、生産者中より数名の役員を選び問屋と協議の上販売に関し価額の協定、販売の方法、取引契約等一切を専行し個人の関与を許さない。
- (2) 桐実は問屋において各生産者各戸につき調整検査を行い、合格したものは直ちに量立をして俵装し荷票をつけ生産者が保管する
- (3) 桐実の調製については、着手及び終了の期間を定め、この期間内にこれを行い、調製の終了した者は問屋に届出、問屋は届順によって量立てる。端数が出た時は他の端数と合して一俵とする。
- (4) 桐実は、前後二期に分けて収納し、後期後のものは小樹量といって問屋で適宜に処理する。
- (5) 出荷日は問屋から生産者に通知し生産者は所定の場所に運搬して船積を了る。出荷は、通例数回に分けて之を行うが、個人の都合によって出荷を拒む事が出来ない、出荷の順序は量立の順序による。
- (6) 代金は当局にて保管し前後二期に分ち、生



産者に配分し、後期のものは年末取引に於て一斉に配分する。

- (7) 桐実の生産者は一定の手数料（一俵五銭内外）を負担する、問屋はその手数料により一切の費用を支弁す。

大体斯様な販売が行われた、これはいう迄もなく大量取引共同出荷の有利を目的としたものである。しかして個人量立を禁じたのは調製の良否を検分すると共に容量の正確を期し、一面不正を防ぐためである。随って野波村の桐実は調製品質等において特に信用を得、村問屋は桐実に関し総ての事務を取扱っていたが、明治十年頃から事務は区長が取扱うことになり、今日に至る迄統制ある販売法が行われている。なお同地方における桐実の取引価格は年により、時期により異なることはいう迄もないが、初期には四五十銭より一円位高価に取引される（油の含有量が多くなるため）今後産業組合で搾油する場合は組合から桐実代の仮渡を行い製油販売後清算を行う。

以上から野波では、大仲間、小仲間、個人という単位でアブラガリを管理し、松江藩時代では「村問屋」が、明治以降では野波区長が収穫された種子を集約して販売していた実態がみえてこよう。

#### 4. 採集活動聞書

最後に、筆者らが平成28年9月に行った聞き取り調査の結果をまとめる。調査は松江市島根町在住の話者6名に対して、凡そ昭和20年代の自身が体験したアブラガリに関する活動についてヒアリングを行ったもので、話者の住居地、生年、性別は以下の通りである<sup>11)</sup>。

島根町加賀別所一昭和11年生（男性）、  
昭和8年生（女性）  
島根町野波一昭和6年生（男性）、  
昭和12年生（男性）  
昭和19年生（男性）  
島根町大芦別所一昭和10年生（女性）

以下、3地域の事例を項目に分けて記述する。

##### 1) 呼称

野波では、多く実をつけ生育の良いアブラガリをチョボ、実のつきが悪いアブラガリをダラと呼んで区別していた。栽培の際は、ダラを間引いていたという。

実と種子を区別する呼称は聞かれなかった。双方をまとめて、キリミ（桐実）、キノミ（木の実）と呼んでいた。桐油については、野波ではゴロタ油と呼んでいたが、加賀と大芦では聞かれなかった。これは後述するように、自身の地区で桐油を精製していた野波と、そうではない加賀・大芦との地域差と考えられる。

##### 2) アブラガリ栽培地と管理者

アブラガリを植えている場所を、加賀別所では桐実畑と呼び、谷間の黒ボク土が多く選ばれたという。加賀別所と大芦別所ではそれぞれの家が所有する山林のアブラガリを管理していたが、野波では7つの組が管理していた。組とは鎌屋・下手・上手・西・東・中・道之下で、これらは野波地区内の地縁組織に相当する。この地縁組織はアブラガリに関するだけでなく、例えば野波の神社祭祀においてトウヤ（祭礼担当）を担う単位である等、生活に密着した共同体であった。

##### 3) 作業形態の差

桐実畑の管理形態が、家主体（加賀別所、大芦別所）と地域主体（野波）で異なっていることと関連して、作業の形態も異なっていた。加賀別所と大芦別所では、基本的に稲作を主とした農家が個別に作業している。人手が足りなければ手伝いを雇用した。加賀別所では、手伝いの報酬として男性は1日米3升、女性は1日米2升が支払われたという。

一方の野波は、農家が組ごとにまとまり、共同作業として取り組んでいた。この差が、以下に見る作業行程に影響している。

##### 4) 下草刈り

アブラガリの実は9月から10月に落ちるため、それまでに桐実畑の下草を刈っておく必要がある。そうしなければ落ちた実が草に紛れて拾うことが困難になるためである。下草刈りの時期は、6月から8月中（大芦別所）、お盆過ぎから9月中（加賀別所）、10月から（野波）と差がある。

下草刈りには何れの地区も柄が1 m50cmほどの長い鎌が用いられた。野波は組ごとの共同作業であったので、約4、50本の鎌を持って山に入り、総出で刈った。

### 5) 実の採集

下草刈りの後、落下した実を採集する。時期は10月の稲刈り前と、暖かくなってきた春の2期に大別できる。

加賀別所と大芦別所では、稲刈り前に一家総出で採集に出かける。その際、取り残しがあるため、稲刈りが始まると、雨などで作業が中断した際に幾度か拾い直しを行う。冬期は実が水分を含んで重くなるので避け、春に再開するという。

野波では、10月に下草刈りと同時に採集も集中して行ってしまう。追いかけていって、草刈りの1 m後ろに続き、実を拾って行く。その後12月に拾い直しを行う。人手をかけられる共同作業だからこそ、作業時期の選択と集中が可能なのである。

実は基本的に手で拾い、藁で編んだツキャ又はツキャと呼ばれる小籠に入れる。大芦別所ではこれを手提げバック状にして用い、野波では前掛け状にして用いている。小籠がいっぱいになると、筵で作った背負籠に移す。これを大芦別所ではカマスと呼んだ。半日でこれも一杯になったという。加賀別所では、深さ60cm、直径40cmほどの竹籠に拾い集め、一杯になるとタジセと呼ばれる縄で編んだ袋に移す。

実を拾う仕事は主に子供や女性の役割で、それを山から各家に運搬するのが男性の仕事だったという。ただし、山の奥から集落までは距離があるため、加賀別所では途中何箇所かに共同の小屋を建て、そこに一旦運び込んで、順次集落まで下ろしていった。

### 6) 種子の取り出し

収穫した実はいずれの納屋で保管する。稲刈りを行っている間に実が腐って黒く柔らかくなるので、11月から12月にかけて足踏み式の臼で実を潰し、ふるいにかけて種子を取り出す。この臼は、野波の歴史民俗資料館に保存、展示されている。稲刈り後に採集した実については、保管しておき春に出荷したという。

### 7) 出荷

加賀別所と野波では、5斗の種子を1俵に詰めた。ここまでを各戸で行い、加賀別所、大芦別所では業者に売った。加賀別所では1軒で年間約60俵出荷し、価格は1俵約4000円だったという。

野波では地区共有の精油工場があった。里路川沿いの現在は平石工業がある場所で、野波で収穫された種子の多くは、地区としてまとめられ、この工場に精油した。桐油は、ほぼ大阪へ出荷されたのだという。

野波に精油工場が建設された時期は昭和3年から8年頃で、ある男性が石川県で精油の技術を身に付け持ち帰ったのが端緒だという。8人が勤務し4人ごとの昼夜2交代制で、冬期は休みなく営業していた。種子の搾り粕は再度搾ったり、俵で売ったりした。

### 8) その他

昭和30年前後にはアブラギリ種子の採集と出荷を止める家が続出した。安価な中国産桐油に圧され、需要が減ったためである。アブラギリは伐採され、代わりに杉が植林された。しかし杉も手入れが行き届かず、結局は建材として利用できなかった。現在、島根町の各所では山林の荒廃が問題視されている。

## 5. おわりに

以上、桐油産業史の概略と、農村におけるアブラギリ栽培、販売の事例をみてきた。18世紀終わり頃から20世紀初頭にかけて、島根県の農家では現金収入を得る重要な副業（農間稼ぎ）としてアブラギリが位置付けられていた。農家は、稲作とアブラギリ栽培・販売を組み合わせ、生業としていた。稲作は田の仕事、アブラギリは山の仕事である。また、野波の事例からわかるように、アブラギリの栽培には地域共同体の在りようが大きく関連していた。

全国的にみて、桐油産業には地域的なムラがある。もちろんアブラギリが生育しやすい／しにくいという自然環境の背景もあるが、直接的な原因は江戸時代の藩政によるものと考えられる。福井、島根両県に桐油産業が栄えた背景について、小浜藩と松江藩の政策を詳細に検討していく必要があるだろう。

近年、アブラギリや桐油を地域づくりのための資

源として注目する動向もあり、これからの有効活用がさらなる課題である。

- 
- 1) 農商務省山林局『油桐ノ造林法並桐油ノ調査』11頁, 1912
  - 2) 神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫 油脂工業 (03-069), 『中外商業新報』1936.2.29-1936.3.6
  - 3) 前掲注 1, 8 頁
  - 4) 国立国会図書館デジタルライブラリー, <http://dl.ndl.go.jp>
  - 5) 前掲注 2
  - 6) 福井県編『福井県史』通史編 4, 近世 2, 1996

7) 前掲注 1, 5 頁

8) 島根県立図書館しまねデジタル百科, <http://www2.library.pref.shimane.lg.jp/webmuseum/>

9) 島根町誌編纂委員会編『島根町誌』本編, 島根町, 1987, 727頁

10) 前掲注 2

11) 本調査は、島根大学地域未来戦略センターが島根大学生を対象として企画した「地域分析のためのフィールドワーク入門－観察と聞き書き－」(平成28年9月29日実施)のなかで行われたものである。

(受稿 平成29年1月23日, 受理 平成29年2月7日)

